

平成25年度西宮文学案内

春講座 第3回「西宮スター千一夜 森繁久彌・森光子から芦田愛菜まで」

日時：2013年7月28日（日）14時～15時30分

場所：西宮市大学購入センター大講義室

講師：文化プロデューサー 河内 厚郎 氏

西宮芦屋研究所 小西 巧治 氏

**河内** お暑い中、お越しいただき有難うございます。今日は思いっきりミーハー的なネタをとりあげます。この後に登場される小西さんもかなり有名人になられまして、今年から大学の講師にもなられました。団塊の世代、定年組の理想の人生を歩んでいらっしゃいます。細かいところは小西さんが資料を見せてくれますので、まず私から総論概論を申し上げます。

まず阪神間の映画撮影所についてですが、京都の撮影所の話はよく出ますけど、阪神間の映画の撮影所の一覧表は今までなかったの、「阪神奈撮影所変遷図」を作ってみました。映画の撮影所があった町というのは、そうありません。東京、鎌倉、京都、阪神間の西宮・芦屋・宝塚、大阪や奈良にも一時期ありました。関東大震災で映画人が移ってきたので関西にも撮影所が増えたという風にかかれた本が多いのですが、関東大震災の直前から阪神間での映画撮影は始まっています。芦屋の帝国シネマは、阪急芦屋川駅の北側、開森橋のあたりに撮影所があり、有名な『籠の鳥』という大ヒット作をここで撮っています。帝国シネマの母体は東大阪の長瀬、今の近畿大学のあたりで、大きな撮影所だったんですけど、火事で焼けてしまいました。

「西宮市史」にも出ていますが、大正末期、今の甲陽大池のあたりに東亜キネマというガラス張りの撮影所が出来ました。これは大正時代に景気よかった業界、保険会社とかが絡んでいたようです。監督は、よくテレビにも出ていた山本嘉次郎。佐藤愛子さんのお父さん、佐藤紅緑が文芸部長。俳優では榎本健一ことエノケンらが関東大震災で移ってきて、ここで谷崎潤一郎のシナリオによる映画も撮ったりしています。この撮影所は長くは続かなかったものの、昭和に入ってから甲陽キネマという名で活動を続けていた時代があり、うちの母などは小学校の頃、廣田神社と東亜キネマの撮影所跡へ遠足に行ったとか言っていました。その後、羽曳野の古市のほうに一部が移って極東キネマになったりと、いろんな変遷がありました。

今の夙川の片鉾池のあたりには、大正の終わりから昭和の初め、「キネマ旬報」の編集部が結構長くありましたし、岡田茉莉子さんの父、俳優の岡田時彦が夙川で亡くなっています。その妻、つまり岡田茉莉子さんの母は宝塚の男役でした。

来年はその宝塚歌劇が百周年を迎えます。4月1日が宝塚歌劇第1回公演から百年目。宝塚が東京に進出した東京宝塚こと「東宝」は80周年。宝塚市制60周年。『ベルサイユ

のぼら』が初演から40周年、手塚治虫記念館の開館から20周年。100って区切りはすごいし、しかも80・60・40・20周年と全部そろそろ、そんな年ってありません。中川市長が再選されて張り切っているところに放火騒ぎがありました。あの宝塚市庁舎は、30数年前、役所としては贅沢な建物でした。村野藤吾という有名な建築家の作品で、西宮でも商工会議所やトラピスト修道院、神戸では前の近代美術館、今の原田の森ギャラリーがそうです。今の県立美術館は安藤忠雄さんの設計ですが。宝塚南口近くの線路の横に変わった建物がありますが、あのカトリック宝塚教会も村野作品です。村野藤吾は宝塚の清荒神に住みましたので、自分が住む町の市庁舎の注文を受けて設計したわけです。大きなベランダを周りにめぐらせたので、放火の際も職員がベランダに逃げられて死者が出なかった。普通の市役所なら逃げ場がなく、煙が充満して、たぶん大惨事になっていたでしょう。この事故を機に市庁舎の素晴らしさをアピールしていきたいと市長は張り切っていました。政治家はプラス思考なので感心します。

宝塚では1938年、阪急電車と宝塚歌劇をつくった小林一三によって撮影所が出来ます。昭和13年といえば宝塚少女歌劇の人气が全国的になって、退団するや東京へ行ってしまふスターが多く、やはり地元にも撮影所がないとだめだと、小林一三が武庫川町のファミリーランドの一角に宝塚映画製作所をつくりました。その当時のフィルムが10年ほど前に出てきたのを宝塚映画祭で上映しました。男役がそのまま男の役で出ているんです。タカラヅカの舞台はそういうものですけど、映画だと不思議で…しかも男優も出ているので、ややこしい(笑)

この後、戦争が激しくなると国策により映画会社が合併させられて宝塚の撮影所は閉鎖されます。それが1951年に再開して宝塚映画製作所となりますが、1953年に火事で焼けるのが、小林一三の池田の家から炎が見えたそうです。保険をかけていたので損害はなかったようですが、昭和25年のアメリカ博覧会の跡地を仮設の撮影所にして、昭和31年まで宝塚映画製作所は西宮北口にありました。邦画の全盛期に入る頃で、相当な数の映画を作っています。そのとき専属俳優となったのが中村扇雀、今の坂田藤十郎で、宝塚の扇千景さんと知り合うというエピソードがありました。

この数年間、90歳を超える芸能人が次々なくなっています。森繁久彌、山田五十鈴、森光子…去年亡くなった中村雀右衛門は歌舞伎界の最高位までいった人ですけど、昔、大谷友右衛門という名で映画に出て『佐々木小次郎』でスターになりました。この人の映画も宝塚映画の西宮スタジオで撮っています。

森光子は、兵庫県立芸術文化センターが8年前にオープンしたとき柿落としに出たいとの申し入れが本人からあったそうです。何故かという、昭和30年代半ばまで西宮北口に住んでいたからで、当時は朝日放送にレギュラー番組を持ち、宝塚新芸座にも宝塚映画にも出ていました。森光子といえば『放浪記』が有名ですが、宝塚映画では『放浪記』を撮っています。映画で主演したのは高峰秀子です。森光子はまだ映画では主役ではなかった。軽演劇では主役級になっていましたが、梅田コマ劇場が開場してバラエティー的な舞台に

出ていたとき、たまたま東京へ帰るまでの数分間の時間を菊田一夫が観て「間のいい演技している」ということで東京へ呼びよせたということです。無名の女優を『放浪記』の主演に抜擢したのが昭和36・37年のこと。それまでは西宮在住でした。当時、西宮市が西宮まつりというのをえべっさんとかでやっぴて、西宮在住の芸能人、森光子と藤田まことの二人が司会していたそうです。藤田まことも西宮北口に住んでいましたので、二人で朝日放送からタクシーで帰ってくるということもあつたようです。当時は関西歌舞伎もまだ健在で、西宮に住んでいた歌舞伎役者も西宮まつりに出ています。林又一郎、今の林与一のお祖父さん。二代目鴈治郎のお兄さんですね。

市の資料室に残っている当時の西宮祭の記録を見ますと、ミスコンで選ばれた「ミス西宮」がパレードに参加しているのですが、なんと自宅の電話番号が公開されています。今だったら考えられないことで、西宮在住の芸能人の住所も公開されています。情報がすぐには行きわたらない時代だったのかもしれませんが、昭和39年の市政ニュースでは、ホームラン王になったタイガースの藤本勝巳さんと夫婦だった島倉千代子さんが甲子園何番町と住所まで出ています。当時、紅白歌合戦で紅組の前半のトリが島倉千代子、後半が美空ひばり。白組は前半が春日八郎で後半が三橋美智也が多かつたというのが私の記憶です。そういう大歌手の住所まで公開していたとは驚きです。

最近では西田ひかるさんがよく取りあげられていますね。ちょっと前は石田ひかりさんが西宮在住でしたが、桜田淳子さんの甲陽園時代のことはあまり出ません。

西宮は住環境がいいので関西在住の芸能人が多く住むというのが一つにはありますが、もう一つは仕事が地元にあつたということも事実です。今津山中町、久寿川駅の北のほうにはマーキュリーレコードというレコード会社が昭和40年ぐらいまでありました。首都圏以外で唯一本格的なレコード会社で、『月の法善寺横丁』の藤島桓夫、西田佐知子、森光子なんかもここからレコードを出しています。

今津線沿いは、宝塚歌劇はもちろんのこと大衆的な芝居をする宝塚新芸座もあり、撮影所も西宮から宝塚に戻つた後も今津線の沿線にありましたから芸能人が多かつたんです。

数年前、夙川に「コブレンツ雲井」という立派な建物のギャラリーが出来まして、8月に写真を中心に展覧会をやります。清朝最後の皇帝、溥儀の弟である溥傑の娘さんが甲子園にお住まいで、大きな屋敷に住んでおられたのを、ご主人が亡くなられてからマンションに移られ、いろんな資料を何処かに寄贈したいという申し出がありました。たまたま関西学院が時計台のところに博物館を建設中で、来年の秋にオープンします。関西労演の資料とかを集めていますが、ラストエンペラー関係の資料もと話が成立しまして、今年の秋に寄贈、来年の秋に公開します。その前に市民の方に見ておいていただきたいと思つて展覧会を企画しました。5月に芦屋でやつたときは大きな反響がありました。そういう人がまだまだ他にもいらつしやるでしょう。そういう資料を地元で守つて大学教育にも活かしていただきたいと思ひ、仕掛けてみた展覧会です。

ベルトルッチ監督の『ラストエンペラー』は、事実と違ふところもありますが、評判の高

い映画でした。清朝最後の皇帝、溥儀は文化大革命の最中に61歳くらいで亡くなりますが、子供の頃に皇帝になり、その後、清朝が滅び中華民国が出来ますが、日本が満州国をつくるときに宣統帝という皇帝に担ぎ上げられます。実質は日本の関東軍の傀儡政権でした。溥儀は子供が出来ない身体でした。弟の溥傑は学習院で日本語を勉強し、その後、日本の陸軍士官学校へ入って日本の軍人として教育を受けます。日満一体化をはかるため日本人と結婚させようと選ばれた見合い相手が、嵯峨浩さんという嵯峨侯爵家のお嬢さんで、母方が明治天皇の生母に当たります。最初は皇族と結婚させたかったのですが、皇室典範でそれが出来ないということで華族の令嬢になりました。その間に生まれたお嬢さん、福永嬢さんが甲子園にお住まいなんです。父方が満州国の皇帝の一族、母方が天皇家の生母という大変な家系です。5才のとき日本が敗れて満州国も滅亡し、それから1年5ヶ月、母と大陸を逃げ回って、奇跡的に引き上げ船に乗りこみ日本に帰国できたわけですが、父の溥傑はソ連に抑留されて中華人民共和国に引き渡され、昭和35年の暮れまで収容所生活を送ります。父と母娘は昭和36年に16年ぶりに再会をはたしました。

浩さんのことは京マチ子主演で『流転の王妃』という映画にもなり、何冊か本にもなっていますが、先年テレビで常盤貴子さんが浩さんの役を演じました。そしたら常盤貴子さんと嬢さんの息子さんが上甲子園中学で同級生だったとわかり、大きな話と身近な話がくっつきました。歌舞伎でいうと時代物と世話物が合流するといった感じですが。常盤貴子さんは松下幸之助の奥さんのむめのさんも『神様の女房』で演じていますから、西宮ゆかりの女性の役を二つ演じたことになります。

小西さんは芦田愛菜さんのことも研究していますので、そのへんもご説明いただこうと思います。

タカラヅカ百周年は阪神間にとっては一つのチャンスでしょうね。これから百周年の関連番組がいろいろ出てくると思いますが、歌劇だけではなく周りのいろんなものをくっつけた話題にして欲しいなと思います。昨年末、NHKで67期生のドキュメンタリー番組がありました。大正3年（1914）初舞台組が第1期生で、来年4月の初舞台生が100期生。67期生というのは1981年初舞台。今は50過ぎになっている黒木瞳さんとか真矢みきさん、涼風真世さんとかスターの多かった学年で、なかでも一番美しく将来を期待された女性が御巢鷹山で亡くなります。残された38人の同期生の中には、芸能界の第一線にいる人、新地でママをやっている人、郷里に帰ってバレエを教えている人…いろいろですけど、人生の後半期に入った節目に、もう一回気持ちを新たにしたいと御巢鷹山に登って、亡くなった同期生を悼み、これからの人生をふみだすという構成でした。67期生だけでも感動的な話になります。同期生の絆ってすごいみたいです。16.17歳から22.23歳まで、ほとんど一心同体で共同生活をするから、一生の絆になるわけですね。百年間の中には様々な時代のドラマがありますから、68期生も69期生もそういう番組を作ってみたいと思うでしょうし、そのなかに阪神地域の思い出も出てくると思うんです。私が覚えているのは、西宮球場で宝塚歌劇団の運動会があり、無料なので見に行ったこと

があります。ブレーブスも8時半に勝っていたらよくタダで入れてくれたものですが、運動会で素顔を見せファンと交歓した、そんな記憶も伝えられなかったら忘れられていきます。

歴史は勝ち残ったほうだけが記述されるものです。歴史をふり返ってみると、日本の正史、正当とされる歴史の裏に埋もれてしまった歴史が山のようにあります。数十年前まで「歌の宝塚に踊りのOSK」と言われたOSKの支援を近鉄がうちきって解散させられ今は新生OSKとして頑張っていますが、それでもだんだん忘れられていきますよね。10年前の解散でもそうですから、宝塚歌劇に男子歌劇団員がいたなんてことはまったく忘れられています。昭和20年暮れから昭和29年まで8年半、まさかと思われるかもしれませんが男子歌劇団員がいました。辻則夫さんというジャーナリストが丹念に調べて一冊の本にまとめ日の目を浴びました。『宝塚BOYS』というミュージカルにもなり、芸文センターで上演されています。そんな蔵の奥にしまっている古い歴史の話…古いといっても数十年前なんですけどね。当時はかなり知られた話でも、ちょっと経てば忘れられてしまう。宝塚歌劇100周年・東宝80周年をきっかけに、それにまつわる今津線界隈の芸能界の話や文芸界の話を蔵から引っ張り出してきて棚卸してみたいのです。

このあとは映像つきの資料で西宮市に住んだ芸能人の軌跡を詳細に追ってみます。いろいろな人が出てきます。資料の裏に昭和39年の市政ニュースを載せています。島倉千代子さんご夫妻が写っています。最近、藤田まことが亡くなったとき、森光子さんが出席は出来なかったけれど故人へ向けたメッセージの中に西宮時代のことが入っていました。それでは小西さんにバトンタッチします。

**小西** それでは私の方から画像を使いまして、今の河内先生のお話を具体的にご紹介させていただきたいと思います。これほど西宮というのは、文学だけじゃなくて芸能の面においても、ものすごく層が厚い街だなということを再確認した次第です。

『スター千一夜』は皆さん覚えていらっしゃるかと思いますが、1959年から1981年までフジテレビ系でやっていた番組です。千一夜と言ってしましても6417回あったらしい。当初は「スタ千」とされていました。第1回ゲストは長門裕之と津川雅彦、最終回が美空ひばりでした。

スターが多く住む街の条件として、一つは住環境があります。西宮はいつも関西では住みたい街の上位にランキングされています。東京でいえばスターとしてトップを極めた人が成城や田園調布に住みますけれど、関西でもそういうことが言えるのではないかと。

それから仕事場が近い。先ほど映画の撮影所やマーキュリーレコードがあったという話もありました。今は東京一極集中になっていますが、現在でも京阪神にはスターが活躍する場がまだあります。芸文センターには毎日のようにスターが来ていますが、西宮ゆかりのスターというと…西宮で芸能活動をしていた、西宮で生まれたか育った、西宮の学校へ通っていた、或いは卒業した。西宮に住んでいたか住んでいる…現在でもそういう方がい

らっしゃる。

これは誰でしょうか？

仕事場としては北口の宝塚映画撮影所、それから鳴尾村西畑といわれるところ、鳴尾小学校に行っていました。住んでいたのは鳴尾村と今津…ピンとくる方もおられると思いますが、森繁久彌さんです。森繁さんは成人してから趣味でヨットをやっていまして、西宮ヨットハーバーに再三来ていました。

先ほど東亜キネマのお話がありました。意外なのは、エノケンこと榎本健一さんは浅草の芸人だと思っていましたが、映画でデビューしたのは西宮なんです。『喜劇こそわが命』という本に「兵庫の六甲山脈のはずれに甲陽公園というのがあって、宝塚を真似して、千人風呂をつくったり、少女歌劇をやったりして、人を呼んでいた。そこで新しく撮影所をつくったのであった。三人ばかりの同行者があって、僕が皆の旅費をつくって出かけて行った。最初は研修生ということだったが、どういうわけか、僕はすぐに見い出されて、主役でたちまち映画を二本撮った。そのうち一本の題名は今でも覚えている。『異国の娘』というのであった。もちろんまだ無声映画の頃である」とはっきり書いているのに、エノケンのウィキペディアを見ても西宮の部分だけポコッと抜けています。東京から関西に来たけれど、どこにいたかといえば京都になっているんです。本人が書いているのに。

東亜キネマ撮影所はこんな場所でした（写真提示）ここに駅舎が見えます。このへんにガラス張りの劇場があって、撮影所や公園があった。甲山へのぼる途中に料亭があり、その名残りが「播半」や「つる家」です。池があって、いろいろな遊戯施設もあった。少女歌劇团的なものもつくったということです。これが甲陽公園の全景です。

この頃、関東大震災が契機になったという話もありましたが、芸能人、文化人の民族移動といえば大げさな言い方ですが、エノケンと谷崎潤一郎がニアミスというか結果的に近くに住んでいました。エノケンは地震の後に来て『異国の娘』と『謎の指輪』という2つの映画を撮ります。谷崎潤一郎は「箱根の山道でバスに乗っており、その谷側の道が崩れるのを見る。横浜山の手の自宅は、地震恐怖症なので頑丈に造られており無事だったが、類焼してしまう。震災後、京都へ移住後、兵庫へ移る」と出ています。苦樂園には大正12年12月から13年3月まで短い期間ですけれど住みました。阪神間に来てから何十回と引越しをしています。

佐藤愛子・サトウハチローのお父さん、佐藤紅緑は、今の阪神甲子園駅の南側、当時の鳴尾村に住んでいました。鳴尾といえば武庫川女子がある鳴尾を思ってしまいましたが、実際は阪神甲子園の南側です。

戦前もこのように撮影所があり、スターがいた。戦後は宝塚映画撮影所が火事になった後、アメリカ博覧会後の西宮北口にスタジオが来ます。アメリカ博覧会は昭和25年に6か月間行われた博覧会で、その頃西宮にいらっしゃった方は覚えておられると思いますが、本当に盛大な博覧会でした。ナイアガラのミニチュアが出来たり、B29を民間機に改造した飛行機のほぼ実物大が展示されたり、200万人が来たという博覧会の跡地が空いてい

たので急遽撮影所に使ったということです。

ここで出会った美男美女、当時は大物カップルでした。扇雀から鴈治郎、坂田藤十郎になって2009年に文化勲章を授与されます。扇千景さんは女性初の桐花大綬章、今現在女性が貰っている勲章で一番上の勲章を授与されています。二人がここで会う。これについては「西宮北口がハリウッドだった時代」の時、お亡くなりになりました宝塚映画製作所の美術監督、近藤司さんと河内先生の対談に出てきます。

**河内：**近藤さんが宝塚映画製作所でたく

さん美術を担当なさっていた頃、ちょうど近藤さんと同じ年齢で西宮の撮影所で活躍していた俳優という、中村扇雀、いまの坂田藤十郎ですね。あの人が宝塚映画製作所の西宮北口の撮影所で知り合ったのが扇千景さんであるということになってくるわけです。中村扇雀さんのことはよく覚えていらっしゃいますか。

**近藤：**そうですね、ちょうど扇千景さんとなんかややこしくなったという、ちょうどそのころです。

**河内：**それは、スタジオのなかでも二人はできているか分かるわけですか。

**近藤：**あれは分かります。

すぐにね、わっと一緒に二人がさっと消えるからね。だいたい、皆も察しとったわけですよ。

**河内：**それはどこへ行っているんですか。

**近藤：**あとで聞くと、なんか六甲のホテル、阪急の、そっちへよく行っていたらしいですけどね

西宮文学回廊というウェブサイトにも、これまで西宮文学案内で話したことがテープ起こしされて、この話も全部入っています。

扇千景さんは宝塚の映画専科ということで宝塚音楽学校を出てすぐ映画に出ていました。1954年（昭和29）、『快傑鷹』や『照る日くもる日』の共演相手が長門裕之でした。長門裕之は子役のときは長門裕之という名前じゃなかった。映画『無法松の一生』に子役で出ていたとお聞きしましたが、長門裕之となって出てきたのは西宮の撮影所でした。どういうわけか翌年の共演相手は扇雀に変わったということです。この頃の映画の撮影はすごく短く、長門裕之さんとのを見ても9月5日から始めて25日で終わる。三部作って9月5日から10月18日で終わっている。これで3つも作っています。扇雀との共演においては中村玉緒なんかも出て来ていて、扇雀さんの家族も含めて扇千景さんと共演しました。長門裕之が出した『洋子へ』という暴露本でそのへんのことは詳しく書かれていますので、興味ある方はお読みになったらいいと思います。

文化勲章かつ国民栄誉賞を大衆芸能という形でもらったのは森繁久彌さんです。国民栄誉賞は亡くなってからだと思えますけども。いろんなところを見ても1913年枚方出身

と書かれていることが多いのですが、本人は枚方よりも鳴尾という記憶がすごくあるみたいです。4つの頃に鳴尾に来て鳴尾小学校に入りますが、お母さんが教育ママだったので北野中学へ入れたかった。鳴尾小学校だと入れないので6年のときに堂島小学校へ転校しています。

甲子園にバスのロータリーがあり、その横の三井住友銀行に石垣みたいなのがまだ残っています。ちょうどそこが森繁さんの育った西畑の家でした。その横に佐藤紅緑の家もありました。そのあと森繁さんは今津へ転居しています。

森繁さんは1953年に西宮北口の撮影所で『喧嘩駕籠』という作品に出ています。トニー谷、柳家金五郎、森繁久彌、大谷友右衛門、八千草薫という豪華メンバーで、貴重な写真です。森繁久彌も大谷友右衛門も功なり名を遂げて文化勲章を受章しました。

森繁さんは西宮ヨットハーバーによく来られていました。「ふじやま丸」という豪華な船を持っていらしたんですが、『アップさん船長』という本にこうあります。

借金まみれになりながら一年がかりで「ふじやま丸」を完成させ、浸水式には皇族や大臣まで招き管弦楽団の演奏でもてなすという豪華の絶頂を味わう。直後、大阪で舞台にたった森繁は「ふじやま丸」を西宮に係留する。ところが公演中のある夜、台風が港を通過することを心配した森繁夫妻は船に泊まる。風雨の凄まじさに目覚めたときに、船は木の葉のように嵐にのまれ座礁した。船を捨て救命ボートで海に降りた二人は、荒波にのまれて海の藻屑となりかける

ヨットの専門家に聞きますと、本来イカリをクロスしなければならないのに、それをしていなかった。助けた人も死ぬんじゃないかと思って命からがら助けた。こういうことで森繁さんは西宮に対して深い思いをもっていたらっしゃった。

西畑にあった保育園の出身者だけで「いちごかい」という会を作っています。阪神電鉄は明治38年に電車を通して文化人が作る街を作りました。裁判所の判事だとか文学者だとか当時としてはものすごくレベルの高い人が住んでいましたが、のちに東京で活躍された方もあり、東京で「いちごかい」を始めたのが「鳴尾会」に発展して、森繁さんが90歳近くになるまで毎年そういう集まりをしていたということです。

森繁さんが書いた1961年の西宮の市政要覧があり、本当はすごく長い文章で、手書きで書かれた絵の部分だけ皆さんにお見せしているのですが、これが森繁さんが住んでいた頃の甲子園です。ここを埋めて甲子園球場が出来ました。武庫川は今もありますが、枝川は甲子園筋という道になっています。路面電車も走っていましたね。森繁さんが住んでいた大正7、8年頃に甲子園駅はありません。川の上の鉄橋だけでした。ここに甲陽中学ってありますけど、昔、甲陽学院があったところはノホテル甲子園というホテルになっています。

西畑の町と書いてありますが、駅から歩いて数分のところですよ。西畑公園だけが残ってい



ますが、ここに文化人の町があり、そのときの名残りとして松が何本か生えています。甲子園球場へ行く途中に土産物屋さんが並んでいますけど、高いところに土手があるのは川の土手です。枝川の名残りが一番残っているのは甲子園駅の南側ですね。そこに松があり、よく首吊りがあったと書いています。それほど寂しい場所でした。

「西宮今昔」の文章は政治的な意味を持っています。当時、西宮は二つに割れていました。西宮の沖を埋めて日本石油を誘致し石油コンビナートをつくと議会で決まっていたのを反対運動で中止させ、選挙で争って、推進派の市長さんが落選しました。推進派は森繁さんを使って、西宮の新しい街づくりに賛成してくれと書いてあります。森繁さんは利用されかけたんですね。

『スター千一夜』は、一回目が長門裕之・津川雅彦、最終回が美空ひばりと言いましたが、長門裕之の名前でデビューしたのが西宮の撮影所で、西宮北口の撮影所から再建された宝塚映画の第一作が美空ひばりの『恋すがた狐御殿』でした。

森光子さんは北昭和町に住んでいました。日経の「私の履歴書」を本にした『人生はロングラン—私の履歴書』は、森光子さんの生涯がよく分かる、いい本です。字も大きく、私もメガネがなくても読めました。西宮の図書館にもありますので、ぜひ読んでみてください。

森光子さんは今津山中町のタイヘイレコードで「白衣の勇士を送る歌」を戦時中にレコーディングします。戦争で怪我をされた傷痍軍人の方が帰ってきて、治ったのをまた戦場に送るといような歌があまりにも感傷的だということで検閲にかかって出ることにはなかった。森さんが入れた唯一のレコードで、そのあとずっと持って回っていました。レコーディングは出来なかったけども歌手として満州や東南アジアへ慰問に回っていたんです。びっくりするようなところまで行っています。満州というのは今の中国東北部地方ですが、東南アジアでもシンガポールやマレーシアではなくて南半球のチモールとかパプアニューギニアまで行っています。

藤田まことさんも歌手になりたかったんです。マーキュリーレコードの地方巡業に歌手として参加したら、司会者が病気になって代役を頼まれた。歌よりうまかったということだと思いますが、これからは司会をなささいということになり仕事を替えたというのが実情です。

舞台上の二人は西宮神社で西宮まつりをやったときの写真です。左側が森さんで、右側が藤田まことさん。明らかに西宮と分かるのは、中央商店街の電気屋さん、八木電気商会。懐かしいのは右側の亀屋、甘味屋さん。こういう広告を出してもらっている西宮まつりというのがありました。この写真は第6回くらいだったと思います。二人は西宮市のお抱えタレントとっていいくらいでした。真ん中は名物市長と言われた辰馬卯一郎市長で、このあと田島淳太郎さんになって辰馬龍雄さんになる。田島淳太郎さんのときに日石問題がありました。市長さんを真ん中に、こんな二人の写真が当時の市の広報誌に出ていたわけです。

藤田まことが亡くなったとき、こんな記事が出ていました。

2人は1957年に朝日放送のドラマ『ダイラケのびっくり捕物帖』で兄妹を演じて以降は共演はなし。2人とも当時、兵庫・西宮にある阪急電鉄西宮北口駅近くに住んでおり、収録のときには森が藤田を車で送り迎えするほど仲が良かった。森は『年長の私がアッシー姉さんを務めていました』と振り返り、関西弁でやりとりできる数少ない友人の死を悼んだ。

意外だったのは、あの番組で与力役だった藤田まことがお兄さん役、13歳年上の森光子が妹役でした。森光子さんが若く見えていたということだと思います。

森光子は満州へ慰問に行っていた頃、愛新覚羅溥傑さんと出会っています。『人生はロングラン』の中に出てきます。

「明日はアジア号に乗るよ」・・・中略・・・確か新京から哈爾濱へと大平原を疾走する車中でした。満州国の溥儀皇帝の弟、溥傑閣下がお乗りになりました。

溥傑さんは西宮にも来られています、こういう出会いもあったということです。

西宮まつりの話に戻りますが、昭和29年の2回目くらいからマーキュリー歌手市中行進、ミス西宮発表会、歌謡大会、この時が藤島恒夫・野村雪子、司会が藤田まこと。第3回は歌謡パレード、スターが勝新太郎。第5回では市内有名人芸能大会、森光子、藤田まことの二人が出演しました。それから阪神タイガース・阪急ブレーブス選手及び監督。第6回が市内有名人芸能大会で森光子・藤田まこととプロ野球選手。今から考えたらすごく贅沢な人を市民まつりの司会者で使っていたのが西宮でした。

これは西宮まつりの藤島恒夫・野村雪子、この二人はこの後、東京へ引き抜かれます。マーキュリーの最後の社長さんがまだご健在なので見せていただきましたが、昭和29年当時の藤島恒夫の月給が8000円。調べてみると大卒の給料ぐらい。そんな形でバンバン使っていたため、この給料の100倍ぐらいの給料で引き抜かれたらしいです。

野球選手も西宮まつりにも出ていましたが、西宮は阪急ブレーブスと阪神タイガースのフランチャイズ球場があるという、人口数十万の町としたらどこにもない贅沢な町でした。島倉千代子さんのようにスターが有名選手と結婚した後、在住することもあり、二人で市政ニュースに住所まで出ています。ミス西宮に選ばれた女性も自宅の住所まで出ていました。

2000年、ミレニアムの年に西宮市政ニュースのトップを飾った藤原紀香さんも西宮北口近辺に住んでおられたらしいのですが、宝塚の北のほうに行かれて、今、ご両親は苦楽園近辺にいらっしゃるということです。学校は親和女子。結婚式は生田神社でした。西宮神社でやっていたらあんなことになってなかったのではないかという意見もありますし、

逆に西宮神社でやらなくてよかったなという意見もあります。2000年に藤原紀香さんが「輝かしい21世紀に向けて」というメッセージを市政ニュースのトップに出しています。

謹んで新年のお祝いを申し上げます。私がふるさと西宮市を離れ東京に移り住んで5年の歳月が経ちました。その間、私の人生においてたくさんの忘れられない出来事がありました。特に昨年は女優としての活動も軌道に乗り、初めての写真集やビデオ、フォトエッセイ集を創作し、念願だったタンゴも本場アルゼンチンでレッスンを受けることが出来ました

地震の時の思い出とかもあります。

震災の日から早いもので5年の歳月が経ちました。皆さんの絶え間ない努力で街はすっかりと綺麗になり、私が幼少期を過ごしました西宮北口近辺は、今まさに復興に拍車がかかり、夢ある新しい街へ大きく変わろうとしています

2000年から13年経ち、西宮北口が関西で住みたい街ナンバーワンになっています。芸文センターがあり、ガーデンズがあり、アクタがあり、西宮北口の西北部分には昔の雰囲気も残っている。そんな中で藤原紀香も過ごしたということです。

明石家さんまと芦田愛菜。二人の会話は西宮というものを表すには面白い会話なので音だけ聴いていただきたいと思います（テレビの音源）。愛菜ちゃんの頭の中での西宮は阪神西宮近辺ということのようです。西宮市が昔、西宮町と言われていた頃で彼女が話しています。明石家さんまも師匠の笑福亭松之助が西宮在住なので、弟子入り修業時代に久寿川町の第一久寿川荘に住んでいました。このアパートは現在はないということです。芦田愛菜ちゃんは東京へ引っ越すまで阪神西宮近くのマンションに住みながら新幹線などを使ってタレント活動をしていたということです。バリバリの関西弁を喋れるのですが、新幹線が新横浜を過ぎると突然標準語に変わる。それほど切り替えが出来る才能を持っているんです。幼稚園は西宮市内のA幼稚園からB幼稚園に転園して、お絵かきは甲子園口の某教室に通っていました。最近テレビであまり見ませんが、8月9日公開のアメリカ映画『パシフィック・リム』でハリウッドデビューします。これは菊池凜子の子供時代の役ですが、菊池凜子は『ノルウェーの森』でも当たらなかったのが心配です。ナチュラルな関西弁でボケ、天才子役振りを発揮するのは西加奈子著の『円卓』で、大阪北摂の公団住宅を舞台に少女の成長物語を演じます。これは12月に出来て来年公開、主演で出るようです。

桜田淳子、石田ひかり…最近議員になりましたヤワラちゃんこと谷亮子さんも西宮に住んでいました。

西宮ゆかりの女性を二人演じた常盤貴子は、転勤族のお嬢さんで、小学校4年生から西宮で過ごしました。上甲子園中学では吹奏楽部、西宮文化振興財団の理事長さんが吹奏楽部の先輩になるそうです。西宮東高校へ進学し、お父さんの転勤でまた横浜に戻って駒沢女子高校へ転入。高校卒業後、女優としての活動を始め、2003年に。テレビ朝日の開局45周年ドラマとして2003年に放映された『流転の王妃・最後の皇弟』で愛新覚羅浩役を務めました。DVDでも見られます。浩さんは仮名、溥傑さんは漢字で書家としても有名なので、本来ならその書も展示したかったのですが、コブレンツの展示会では写真だけです。家族の往復書簡—溥傑が戦犯収容所に収容されたとき日本から送った手紙や自筆の手紙のコピーも展示します。

『流転の王妃の昭和史』という本が出て、1960年に大映で映画化されました。写真の左側の方が田中絹代監督で、浩さん役は主演の京マチ子さん、右側の俳優が船越英治です。監督が田中絹代、脚本が和田夏十—市川崑の奥さんです。そして原作が愛新覚羅浩さんと、すべて女性だけで作られた映画で、非常に意義あるといえます。

本岡典子さんが『流転の子 最後の皇女・愛新覚羅嬌生』という本を出されました。嬌生さんは小さい頃、満州を命からがら逃げ回り、共産党軍に守られながら、あるときは国民党のほうになったりして、最後は上海から最後の引き上げ船で帰ってこられた。

流転の子・最後の皇女愛新覚羅嬌生、福永嬌生によればテレビ朝日のチーフプロデューサーであった五十嵐文郎は、当初から主演のキャスティングに常盤貴子をイメージしていた。さらに常盤貴子も浩役を演じることに運命を感じていた。

常盤貴子と愛新覚羅家の関係を知らないままプロデューサーは常盤貴子をイメージしたんですが、常盤貴子は自分がするんじゃないかと思っていたということです。常盤貴子と嬌生さんの次男、清さんとは上甲子園中学で同級生でした。

映画『ラストエンペラー』が公開されたときに、清自身は決してそれについて話すことはなかったが、学校では彼の大叔父に関わる話として知られていた。当時、常盤は清の前の席に座っていた。愛新覚羅一族や家族について様々な質問したが、彼ははぐらかしただけで答えてはくれなかった。その後、常盤は『流転の王妃昭和史』を読んで、一族に繋がる彼の家族について知ることになる。それから12年、もう一度どうしても同書が読みたくなり、友人から『流転の王妃の昭和史』を借り入れた、まさにその翌日ドラマの出演依頼があった。

こういう運命的なことを知って、常盤貴子さんも撮影中は本当に集中して撮影しましたと書いておられました。

『神様の女房 松下むめの』は、高橋誠之助という人が書いた『もう一人の創業者松下む

めの物語』がテレビドラマ化されたもので、第三回で常盤貴子扮する松下幸之助夫人むめのと秋野暢子扮する松下幸之助の実姉、亀山イワの興味深い会話があります。むめのが「何でこんな遠いところに自宅を建てはったんやろ」。というのは、工場は門真にあり、その前は福島大開にあった。それに対するイワさんの「そりゃ西宮は日本一の高級住宅地ですがな」という会話がありました。戦前の話です。この裏の話はいろいろありますが、脚本を書いたジェームス三木は大阪・市岡高校卒で、彼の西宮に対する感覚がこういう感覚で出たということだと思います。今現在、福島区の大開町は、なにわの出世街道ということで、ここの商店街に「松下幸之助創業の地記念碑」があつたりしまして、ここに住んだら出世しますよと伝わっているらしいです。福沢諭吉もここに住んでいたようです。

名次町の松下邸、名次庵に行くとSPにジロツと睨まれますが、満池谷というのは不思議な街です。焼場、斎場があつて、横に浄水場があり、高級住宅地がある。こんな場所は日本中を探してもないでしょう。特に浄水場に関して言いますと、今は完全にふたが閉まっていますけれど、昔は全部オープンでした。いまだに3つが現存しています。西宮の素晴らしい場所だと思いますが、戦前こういう風に言われた街が現在どうなっているかというところ、関西圏で住みたい街総合ランキングに西宮北口があがっています。最近は不思議ですけど梅田や三宮も上位に来ています。あとは夙川であつたり芦屋川であつたり。松下幸之助が偉いと思うのは、当時からのへんの評判も高かったんだと思いますが、50年以上経っても高いというのを見抜いていたわけです。

「文教住宅都市宣言」の50周年が今年ですが、市役所の前に「平和非核都市30周年」がぶら下がっています。「環境学習都市宣言10周年」ということでも10周年が出ているので、「3宣言周年記念コンサート」が芸文センターで9月16日にあり、申し込みの締め切りが今月末。前半がコンサート、後半が街づくりトークで、100mの朝原選手、指揮者の佐渡裕さん、西田ひかるさんに市長、落語家の笑福亭三喬さんが出演します。

「文教住宅都市宣言」というビジョンが50年前に出されたことが今の西宮の評価につながっています。文教住宅都市宣言の歌というのを小学校から中学に上がる頃、毎日歌わされたので、今でも覚えています。この歌が市歌じゃないかと思ったほどよく歌いました。作詞した喜志邦三さんは神戸女学院大学の教授で、詩人として高名な方です。御存知ない方に帰りしなに見ていただきたいのは、アクタの東館と西館の渡りの北側にある「春の唄」の碑です。この「春の唄」という国民歌謡の作詞者が喜志邦三なんです。せっかくいい場所にあるのに目立たない。寄付した西宮ロータリークラブに先日講演を依頼された時、すばらしい碑なんですから、もう少し目立つようにしてくださいと言ってきました。「春の唄」の2番は、この真下にあつた北口の商店街を想定して作りました、というふうに書いてあります。

西宮文学案内は、西宮文学画廊に文章化されているので読めます。今年の4月からラジオ版西宮文学案内が始まり、4月が「ムラカミ文学を生んだ西宮」5月は「西宮が生んだ名作『涼宮ハルヒ』」6月「マンガ・アニメで知る西宮」7月「阪急今津線の作家群像」8月

は「甲子園・鳴尾に関わる文学と文人」を私が話します。ここで私が話したかった佐藤紅禄家族、サトウハチロー、佐藤愛子の話を8月号でさせていただくことになると思います。時間は月曜日の午後8時半から30分間です放送は日曜日の8時半です。ラジオで聴く以外にもネットでもスマートフォンからでも聴けます。聴くのを忘れてもまだ聴けます。西宮の情報関係のシステムはすばらしくて、西宮文学案内のHPで過去のものも聴けます。